

## P15

初診時 4 歳 5 か月男児の 11 年 4 か月の歯科的長期支援—切歯群交換期からの骨格型反対咬合の咬合誘導—

○宮本理恵, 大野陽真, 西川哲太, 宮本茂広, 大野秀夫 (医) おおの小児矯正歯科 (下関市)

【はじめに】小児歯科管理の最終目標は、健康で良好な永久歯列咬合を完成させることにある。とくに、骨格型の反対咬合はできるだけ早期に成長のコントロールを行い、正常な発育軌道へと乗せる必要がある。今回、初診時年齢 4 歳 5 か月から 11 年 4 か月にわたる歯科的長期支援のなかで、切歯群交換期に骨格型の問題を改善し、永久歯列咬合まで咬合誘導を行った症例を報告する。

【症例】《初診》2000 年 3 月 17 日(4 歳 5 か月)男児 《主訴》外傷《咬合誘導開始》2003 年 11 月 5 日(8 歳 1 か月)《現症》Hellman の歯齡:III A、Angle の分類:右側 I 級、左側 II 級 Over jet:-1.5mm、Over bite:2.0mm

《現病歴》2000 年 3 月、4 歳 5 か月時に乳前歯外傷のため来院。その後定期管理を行っていた。乳歯列期の被蓋関係に異常はなかった。2003 年 5 月、7 歳 7 か月時に左側中切歯 cross bite を認め、経過観察を行っていたが、2003 年 10 月 8 歳 0 か月の定期健診時に両側中切歯 cross bite を呈しており、保護者の要望もあつたため、咬合誘導支援を開始した。

### 【支援経過】

| 年齢(歳)       | 4    | 8  | 9    | 10                   | 11   | 12  | 13   | 14   |
|-------------|------|--|------|----------------------|------|---|------|------|
| 経過          | 初診   | 咬合誘導<br>支援開始                               |      |                      |      |   |      | 保定管理 |
| 検査          |      | ▲  |      | ▲                    | ▲    | ▲   | ▲    | ▲    |
| 支援          | 定期健診 | I 期治療<br>(1年5か月)<br>骨格コントロール<br>2×4 system | 定期健診 | II 期治療の準備<br>(1年2か月) | 定期健診 | II 期治療<br>(1年3か月)<br>骨格コントロール エッジワイズ装置<br>臼歯部関係の改善 装置 | 定期健診 |      |
| 特記すべき<br>処置 |      |  |      |                      | △ △  | △ △   | △ △  |      |

【まとめ】本症例は 2011 年 7 月現在 11 年 4 か月と長期にわたり健康支援を行っている。早期治療により骨格型のコントロールを行い、被蓋を改善、また永久歯列完成後エッジワイズ装置を使用するまでに、骨格のコントロールと臼歯部関係の改善を行うことで、小白歯非抜歯により動的治療を終わることができた。咬合誘導を行わない時期にも、ただ経過をみるのではなく、どの時期にどのような問題が起こる可能性があり、どのような治療が必要か保護者に提示し、患者のニーズ把握を行うことで、信頼関係が構築され、患者自信の健康観向上と長期来院につながったと思われる。

## P16

母子の齲蝕活性度の測定と乳幼児の齲蝕ならびに肥満予防の関係

○西村美智子, Rodis Omar\*, 假谷直之, 松村誠士\*, 仲野道代\*

岡大・歯・小児歯, \*岡大・医歯院・行動小児

【目的】18 ヶ月時の母子の齲蝕活性度を母親が知ることが 24 ヶ月時の母子の齲蝕活性度、児の齲蝕罹患や肥満罹患に及ぼす影響を評価することを目的とした。本研究は倉敷環境保健所の倫理指針にのっとって行われた。

【対象と方法】対象者は、2003 年に生まれた児で倉敷市の 18 と 24 ヶ月児健診受けたものうち研究の主旨に同意した 1484 組の母子であった。母子は両健診で齲蝕活性試験を受け、mutans streptococci の母子伝播、嘔み与えの禁止、好ましくない生活習慣の改善や 24 ヶ月時までの齲蝕活性度の改善目標について歯科衛生士から指導を受けた。

【結果】18 ヶ月時では、児の齲蝕活性度が高い児に齲蝕が有意に多く認められた。24 ヶ月時では母子ともに齲蝕活性度が改善した群が 18 ヶ月時の 3 倍になり、児の齲蝕活性度が高い群は半分以上減少した。カウブ指数で示した肥満児は齲蝕に全員罹患しており、母子とも齲蝕活性度の高い群から見つかった。

【考察】母子の齲蝕活性度を測定することは、児の齲蝕ならびに肥満の予防に役立つと思われる。小児科の分野においても乳幼時期の肥満は成長してからも続くとして問題視され始めたが、肥満が惹起する生活習慣病発生と時間差があるため乳幼児の肥満の予防に結び付けるのが困難であり、親は乳幼児の栄養不良は問題視するが肥満は問題視しない傾向があるとされている。

【結論】母子の齲蝕活性度の測定は、児の齲蝕ならびに肥満の予防に有用である。